

四国大学紀要, (A) 41 : 149–157, 2013
 Bull. Shikoku Univ. (A) 41 : 149–157, 2013

須磨巻 八月十五夜、前右近尉の歌

——「列に遅れぬほどぞなぐさむ」覚書——

余 田 充

【論文概要】『源氏物語』須磨巻、八月十五夜、源氏主従四人は海の見渡せる廊に出て雁が連ねて鳴くのを眺めながら、それぞれ歌を詠む。その時、前右近尉が詠んだ歌「常世出でて旅の空なるかりがねも列に遅れぬほどぞなぐさむ」は、和歌には珍しい表現である。

「雁」は、旅人と故郷との関係で、旅人に望郷の念を募らせるものとして中国六朝詩や唐詩によく詠まれる。また雁の中でも群れから別れた「失群雁」「孤雁」「孤鴻」が、旅人の孤独な心情を投影するものとして多く詠まれたのである。蘆雁図や群雁図は花鳥図の一として好まれた図様であった。『歴代題画詩類』禽類部には蘆雁図や群雁図の題画詩が数例あり、蘆辺の上を行く飛雁の詠風にも趣向を凝らしている。

大江千里の句題和歌に「旅雁秋深独別群 行かりも秋すきかたに独しも友にをくれてなきわたらむ」がある。前右近尉の歌（「常世出でて」の「列に遅るる／（列に）遅れぬ（雁）」は、「失群雁」「孤雁」「孤鴻」を詠んだ中国詩を基に、千里歌「行かりも」に学んだものだろう。

翌春、都の桜を偲ぶ源氏のもとに宰相中将が訪れ、二人は歌を贈答する。源氏「雲近く飛びかふ鶴もそらにみよわれは春日のくもりなき身ぞ」に答えた宰相の歌「たつ、かなき雲居にひとり、ねをぞなくつばさ並べし友を恋ひつ」は、千里集・詠懐「あしたつのひとりをくれて鳴声は雲のうへまできこえつかなん」（出典は『詩経』小雅・鶴鳴「鶴鳴于九臯 聲聞于天」）に拠ろう。

これら千里集の二首（「行かりも」と「あしたつの」）は、ともに漢詩文によって不遇・沈淪・無常を表出した歌で、前右近尉の歌「常世出でて」・宰相中将の歌「たつかなき」には、それがそのまま源氏の不遇・沈淪を嘆く気持ちとなって響いてくる。

【キーワード】源氏物語 須磨 雁 和歌 漢詩 源氏絵

一

二十六歳の年の春、朧月夜の一件で右大臣方に謀反の罪を着せられた光源氏は、七八人の供を連れて都を捨てて須磨へ退去する。須磨での謫居生活は、夏、秋、冬と季節を追ってその寂しさ・わびしさが綴られる。秋の

記述は、七月に都では朧月夜尚侍が参内を許されたことを記した後、「須磨には、いとど心尽くしの秋風に……」と、秋風吹く須磨でのわび住まいが次のように記される（源氏物語本文は新潮日本古典集成に拠る。私に歌に番号を付した）。

須磨巻 八月十五夜、前右近尉の歌——「列に遅れぬほどぞなぐさむ」覚書——

前栽の花、色々咲き乱れ、おもしろき夕暮れに、海見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふ御さまの、ゆゆしうきよらなること、所からは、ましてこの世のものと見えたまはず。白き綾のなよやかなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れたまへる御さまにて、「釈迦牟尼仏弟子」と名のりて、ゆるるかによみたまへる、また世に知らず聞こゆ。沖より舟どもの歌ひののしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮べると見やらるるも、心細げなるに、雁の連ねて鳴く声、楫の音にまがへるを、うちながめたまひて、涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき、黒き御数珠に映えたまへるは、故里の女恋しき人々の心、皆なくさみにけり。

① 初雁は恋しき人のつらなれや旅の空飛ぶ声の悲しき

とのたまへば、良清、

② かきつらね昔のことぞ思ほゆる雁はその世の友ならねども

民部の大輔、

③ 心から常世を捨てて鳴く雁を雲のよそにも思ひけるかな

前の右近の尉、

④ 「常世出でて旅の空なるかりがねも列に遅れぬほどぞなくさむ

友まどはしては、いかにはべらまし」と言ふ。

源氏歌①は、恋しく思う都の人を初雁と見なして思いを馳せ、「初雁は恋人の仲間なのか、旅の空を渡つてゆく声がとても悲しく聞こえる」と雁群に掛けて詠う。良清歌②は、「雁はその当時の友ではないが、それを見ると過去の良き日が次から次へと思ひ出される」と雁行に掛けて懐郷の思いを詠む。後半の民部大輔（惟光）と前右近尉の二人は、雁を「常世」の鳥として詠んでいる。民部大輔歌③は、「常世の国を捨てて旅の空に鳴く雁と同様、自分たちも旅の身だから、全く余所事とは思われない」と同調

し、前右近尉歌④は「旅の途中にいる雁も、仲間と一緒にいる間は心が慰む」と座を取り持った趣の歌で締め括っている。

唱和歌は、来雁の雁行（①「つらなれや」、②「かきつらね」、④「列に遅れぬ」）を眺め、その鳴く声を「悲し」と詠っている。雁の鳴き声を物思いを催させるもの、悲しいものとして詠う和歌は万葉以来多いが、前右近尉歌④「列に遅れぬほどぞなくさむ」と「群を離れる雁」を詠むのは珍しい。本稿では、この歌の依拠したものを探り、和歌表現の特異性について考察する。

二

日本和歌では、雁は秋風と共に日本列島に飛来し、冬を経て春霞の中をもとの北方に帰るものとして詠む。中国の詩では前者を「秋雁」「来雁」などと呼び、後者を「春雁」「帰雁」と呼ぶ。秋に来て春に帰る「旅雁」は旅人と結びつきやすい。雁は故郷を離れた旅人（征夫他）に望郷の念を募らせるものとして、六朝詩や唐詩によく詠まれる。

鴻雁、出塞北 鴻雁 塞北に出で

乃在無人郷 乃ち無人の郷に在り

……

冉冉老將至 冉冉として老は將に至らんとす

何時反故郷 何れの時か故郷に反らん

（魏・曹操「卻東西門行」）

故園、眇何處 故園眇として何れの処ぞ

婦思方悠哉 婦思 方に悠なるかな

淮南秋雨夜 淮南 秋雨の夜

高齋聞雁来 高齋 雁の来るを聞く

（唐・韋応物「聞雁」）

八月霜飛柳遍黃　八月　霜飛んで　柳遍く黄なり
蓬根吹断雁南翔　蓬根　吹き断えて　雁　南に翔る
隴頭流水閨山月　隴頭の流水　閨山の月
泣上龍堆望故郷　泣く泣く龍堆に上って故郷を望む

（唐・盧汝弼「和李秀才邊庭四時怨」其三）

韋応物「聞雁」は、秋雨蕭蕭たる夜、郡齋の高樓に、雁の哀しく鳴いて過ぎるのを聞き、故郷を思つて詠じた詩である。盧汝弼「和李秀才」は、李秀の作「邊庭四時怨」（辺境の四時の哀しみを詠った四首の詩）に和したもの。いずれも旅人が雁の鳴き声を聞いたり翔ぶ姿を見て故郷を思うというもので、「旅人―雁―故郷」という構図で成っている。

東来千里客　東来千里の客

乱定幾年帰　乱定まりて幾年にか帰らん

腸断江城雁　腸は断ゆ　江城の雁

高高正北飛　高高　正に北に飛ぶに

（唐・杜甫「帰雁」）

春暉滿朔方　春暉　朔方に満ち

歸雁發衡陽　歸雁　衡陽を発す

……

寄語能鳴侶　語を寄せん　能く鳴く侶に

相隨入帝郷　相隨つて帝郷に入らんと

（唐・李嶠「雁」）

杜甫「帰雁」は、遠方の旅人（杜甫自身）は幾年経ったら兵乱が安定し故郷へ帰ることができるのかと詠う。李嶠「雁」は詠物詩だが、雁に随つ

須磨卷　八月十五夜、前右近尉の歌——「列に遅れぬほどぞなくさむ」覚書——

てみやこに帰りたいと詠う。

また、中国詩では女性が「南翔」「南征」の雁を見て他郷にある夫を思い、断腸の思いがすると詠むことも多い。

群燕辞帰雁南翔　群燕辞し帰り　雁　南に翔る

念君客遊思断腸　君が客遊を念ひて　思ひ断腸

慊慊思帰恋故郷　慊慊として帰るを思ひ故郷を恋はん

君何淹留寄他方　君何ぞ淹留して他方に寄る

（魏文帝「燕歌行」、《文選》、《玉台新詠》）

旅人の孤独な心を詠むのに、片雲、孤雲、孤月、秋月、燕などに託して詠じた詩もあるが、やはり雁が多く詠まれる。雁の中でも特に「孤雁」「群れを離れた雁」に託して自己の孤独の情を詠んだ詩も目立つ。

草蟲鳴何悲　草蟲鳴いて何ぞ悲しき

孤雁獨南翔　孤雁独り南に翔る

鬱鬱多悲思　鬱鬱として悲思多く

綿綿思故郷　綿綿として故郷を思ふ

（魏文帝「雜詩」、《文選》）

悲鴻失良匹　悲鴻　良匹を失ひ

俯仰恋儔侶　俯仰して俦侶を恋ふ

徘徊忘寢食　徘徊して寢食を忘れ

羽翼不能举　羽翼举ること能はず

（宋・江夏王義恭「豔歌行」）

失群寒雁聲可憐　群を失ひし寒雁　声憐れむべし

夜半單飛在月邊　夜半單り飛んで月辺に在り

無奈人心復有憶　奈ともする無し　人心復た憶ひ有り

今暝將渠俱不眠

今暝渠と俱に眠らず

(周・庾信「秋夜望單飛雁」、【初學記】雁)

幾行歸塞尽

幾行か塞に帰り尽くるに

念爾独、何之

念ふ 爾独り何にか之く

暮雨相呼失

暮雨 相呼んで失ひ

寒塘欲下遲

寒塘 下らんと欲すること遅し

(唐・崔塗「孤雁」)

魏文帝「雜詩」は、故郷に帰ろうとして帰られぬ旅人の嘆きを詠っている。宋・江夏王義恭「豔歌行」は、良き連れ合いから離れて一羽になった鴻が、仲間を恋い求めてさまよい、飛び立つこともできず悲嘆に暮れている様子を詠っている。

孤雁、不飲啄

孤雁 飲啄せず

飛鳴聲念群

飛鳴して声は群を念ふ

誰憐一片影

誰か憐れむ 一片の影の

相失萬重雲

万重の雲に相い失するを

(唐・杜甫「孤雁」)

杜甫「孤雁」は、万重の雲の裡に、仲間にはぐれてひとりぼっちになって悲しんでいる一羽の雁を表出し、その一羽の雁に孤独な杜甫自身の姿を重ねている。この四句に続けていう。

望尽似猶見

望み尽くとも猶ほ見ゆるに似たり

哀多如更聞

哀しみ多くして更に聞くがごとし

野鴉無意緒

野鴉 意緒無く

鳴噪亦紛紛

鳴噪するも亦紛紛たり

仲間を追いかけて望みうるだけ遠く望んで飛んできたが、その見込みが無くなっても、まだ仲間の姿が見えるかのように飛び続ける。悲しげな声で仲間を捜しているのを見ると、まだ仲間の声が聞こえてもしているかのようだ、と詠っている。

このように漢詩文では群れから別れた「孤雁」「孤鴻」が非常によく詠まれる。故郷を離れ異郷にいる旅人(征夫他)は、孤雁を眺め、それを自らの境遇にたとえ心を慰めたのである。

三

中国の六朝詩・唐詩に「孤雁」「失群雁」が詠まれた例を見たが、次に題画詩ではどのように詠まれたのか、見てみたい。

自然の根源的な要素として山水を最も重要視する中国では、山水は障屏画の画題として最も重んぜられた。中国の山水画において、自然の景觀に備わる四季、朝夕、晴雨などの推移や変化が注意深く表現されたのである。山水と四季花鳥を組み合わせた山水花鳥なども、やはり四季山水の系統を踏む。山水を背景としてそこに含まれる諸要素がそれぞれ別個にあるいは相互に組み合わせられて、花木、花卉、禽鳥など各種の花鳥図が生み出された。各種花鳥図には、花木や花卉に備わる季節をそれ自体で示す場合がある。松鷹、松鶴、竹鶴、竹雀、芦雁などは画題として最も好まれた組み合わせである。康熙帝の勅修にかかる『歴代題画詩類』禽類には、「観張上達家惠崇蘆雁図」(宋・朱松) 以下、「題自画蘆雁」(宋・李膺仲)、「跋米元章蘆雁図」(元・王惲)、「題蘆雁図」(明・胡奎)、「題黄筌蘆雁」(明・僧米復) など蘆雁図が五例、「雁図」(宋・姜夔)、「題墨雁」(元・楊維禎)、「百雁図」(元・戴表元)、「群雁図」(元・呉師道)、「題飛鳴宿食蘆雁」(元・戴需)、「宿雁図」(明・張泰) が各一例見える。

晚来无事理扁舟

晚来事无く扁舟を理め

喚起騷人漫浪愁

騷人 漫浪の愁を喚起す

過眼飛鴻三兩字

眼を過ぎる 飛鴻 三兩字

淡煙寒日荻花秋

淡煙寒日 荻花の秋

〔題自画蘆雁〕宋・李膺仲

草草書空不作行

草草空に書し行を成さず

相呼相喚過衡陽

相呼び相喚び衡陽を過ぐ

蘆花月冷應无夢

蘆花月冷やかにして応に夢无かるべし

啄尽寒沙一夜霜

啄み尽くす 寒沙 一夜の霜

〔題蘆雁図〕明・胡奎

これらは、雁の隊列を「飛鴻三兩字」「草草空に書す」と、文字に見立て

て詠んでいる。前者は隊列が疎らなことを、後者は雁行が乱れていることを言う。

蘆のざわめく沼沢に群れる雁の悲鳴宿食の生態を描く、蘆雁図や群雁図は中国江南の秋冬の情景に由来するとされる。詩情豊かなこれらの画題で、岸辺で餌を啄み羽づくろいをする雁が、降りてくる雁の列と首を上げて相呼び合うという、伝統的なモチーフが活写されていたのだろう。「群雁図」（元・呉師道）の題画詩は、次のように詠まれた。

飛影成行止共餐

飛影は行を成し 止れば餐を共にす

稻梁易足水雲寛

稲梁足り易く 水雲寛し

誰知江海離群客

誰か知らん 江海離群の客

獨對秋風不忍看

独り秋風に対して看るに忍びず

大空を雁が整然と列を成して飛行し、止まれば仲良く餌を啄む。その肅々とした宿食の営みに比べると、我が身は世間のはぐれ者、とても雁たちに

顔向けはできないと詠う。詩人が言う「飛影成行」とはどのような図様だったのか、興味深い問題である。思うに、動き回る雁の群の一瞬を書き留める表現や、雁の一羽一羽の姿態の描出同様、降りてくる飛雁の描き様にも「行を成す」「行を成さず」のバリエーションがあつたのであろう。群雁を見て己の孤独を初めて知るという発想は、唐・劉禹錫「秋風引」が、

何處秋風至

何処よりか秋風至る

蕭蕭送雁群

蕭蕭として雁群を送る

朝來入庭樹

朝來 庭樹に入るを

孤客最先聞

孤客 最も先んじて聞く

〔劉禹錫「秋風引」〕

と、憂い多い旅人は、群雁を吹き送る秋風を人より先に聞きつけると詠うのに類似する。「群雁」「雁群」の「群」と、自己の「孤」「独」が相対し響き合つて、異郷の客の寂しさが強調されている。

四

須磨で新年を迎えた源氏は、二月二十日余日、南殿の桜を想い、先年の花の宴を回想する。一方、都の宰相中将も源氏を恋しく想い、ある日突然須磨を訪問する。

御土器参りて、「酔ひの悲しび涙をそそく春の盃のうち」と、諸声

に誦じたまふ。御供の人も涙をながす。おのがじし、はつかなる別れ惜しむべかめり。朝ばらけの空に雁連れてわたる。主人の君、

⑤ 故里をいづれの春か行きて見むうらやましきは帰るかりがね
宰相、さらに立ち出でむこちせで、

⑥ あかなくにかりの常世を立ち別れ花の都に道やまどはむ

……

日やうやうさしあがりて、心あわたしければ、かへりみのみしつ
つ出でたまふを、見送里たまふけしき、いとなかなかなり。「いつま
た対面たまはらむとすらむ。さりとて、かくてやは」と申したまふに、
主人、

⑦ 「雲近く飛びかふ鶴もそらに見よわれは春日のくもりなき身ぞ
かつは頼まれながら、かくなりぬる人は、昔のかしこき人だに、はか
ばかしう世にまたまじらふこと難くはべりければ、何か、都のさかひ
をまた見むとなむ思ひはべらぬ」などのたまふ。宰相、

⑧ 「たつかなき雲居にひとりねをぞなくつばさ並べし友を恋ひつつ
かたじけなく馴れきこえはべりて、いとしもとくやしう思ひたまへら
るるをり多くなむ」と、しめやかにあらで帰里たまひぬる名残、い
とど悲しうながめ暮らしたまふ。

先の八月十五夜の源氏主従四人の唱和歌(①～④)は、春のこの源氏・
宰相の贈答歌二組(⑤⑥・⑦⑧)と対照的な構成を成している。①～④は
初雁、秋の来雁を介しての唱和で、⑤⑥は春の帰雁、⑦⑧は鶴を介しての
贈答である。①～④は雁を故郷「常世」から来る鳥としてその行列と鳴き
声を詠んだが、⑥では帰雁に喩えられた宰相は須磨の地を「常世」と見な
して惜別の心を詠んでいる。⑦⑧は「鶴」を詠み込んだ贈答に変わるが、
源氏歌⑦で宰相を「雲近く飛びかふ鶴」に喩えたのは、一つには源氏が宰
相に餞別に贈った「黒駒」に拠ろう。鶴は「相鶴経曰、鶴……蓋羽族之宗
長、仙人之驥驥也」(相鶴経に曰く、鶴は……蓋し羽族の宗長、仙人の驥驥
なり)、「藝文類聚」卷九十・鳥部上・鶴とある。「常世」たる須磨を出
発する「仙人」宰相の乗り物にもなっている。また源氏は「われは春日
のくもりなき身ぞ」と我が身の潔白を照覧あれと宰相に訴えている。源氏

の潔白を正しく照覧するのは、雁よりも千年の「鶴」の方が相応しい(②
で「雁はその世の友ならねども」と詠まれていた)。「千年の鶴」は『淮南
子』卷十七・説林訓に「鶴壽千歳、以極其游……」(鶴、千歳を壽として、
以て其の游を極め……)とあり、『催馬楽』「蓆田」には「蓆田の 蓆田
の 伊津貫川にや 住む鶴の 千歳をかねてぞ 遊びあへる…
…」とある。『和漢朗詠集』下・鶴にも「声来枕上千年鶴、影落盆中五老
峰」(声は枕の上に来る千年の鶴、影は盆の中に落つ五老の峰)、「白居易」、
「清原数声松下鶴、寒光一点竹間燈」(清原数声松の下、寒光一点竹の
間の燈)、「同」とあり、「千歳」や「松」が漢詩文では類型の取り合わせ
である。さらに④「列に遅れぬ(雁)」と⑧「つばさ並べし(鶴)」が対応
する。雁と鶴とは漢詩文や障屏画でも、対句あるいは並列する表現内容と
してよく一緒に取り扱われた。^{注1)}

青田之鶴 青田の鶴

晝夜俱飛 晝夜俱に飛び

日南之雁 日南の雁

従来共帰 従来共に帰る

梁・元帝「鴛鴦賦」、『藝文類聚』鴛鴦

眇眇負霜鶴 眇眇として霜を負ふの鶴

皎皎帶雲雁 皎皎として雲を帯ぶるの雁

(宋・鮑照「冬至詩」、『藝文類聚』冬)

『千里集』^{注2)}49に、次の歌が見える。

旅雁秋深独別群

行かり、も秋すきかたに独しも友にをくれてなきわたるらむ

この49番歌は、前右近尉歌④「常世出でて旅の空なるかりがねも列に遅れぬほどぞなぐさむ」と同じく、秋の旅雁が独り群れを離れて鳴き渡っている様を詠っている。前右近尉歌④は千里集49番歌などに学んだものではないだろうか。『千里集』は漢詩句によって詠んだ句題和歌一六首（うち一首重複）に「詠懷」部十首を加えた形態をとる家集で、49番歌は雁を詠んだ句題和歌五首の中の一首である（句題「旅雁秋深独別群」の出典は未詳）。因みに他の四首の句題は、51「秋雁肩霜婦」（出典、未詳）、54「秋雁過尽無書至」（出典、白氏文集卷十四「寄上大兄」）、55「寒鴻飛急覺秋深」（白氏文集十四「晚秋夜」）、56「寒鳴声静客愁重」（未詳）である。^{注3}

宰相の歌⑧「たつかなき雲、居にひとり、ねをぞなく、つばさ並べし友を恋ひつつ」は、同じく『千里集』詠懷・121の次の歌に拠るのではなからうか。

あしたつ、の、ひとり、を、く、れて、鳴、声、は、雲、の、う、へ、ま、て、き、こ、え、つ、か、な、ん

（千里集・詠懷・121、古今集・雑下・998）

千里集121番歌は「詠懷」部十首中の第五番目に位置する。「詠懷」歌は作品の献上に伴って述懐の思いを詠み添えたものである。^{注4}この歌は『詩経』小雅・鶴鳴「鶴鳴于九臯、聲聞于天（鶴 九臯に鳴く、声 天に聞こゆ）」を出典としており、句題が示されないこの歌も漢詩文の発想に拠って詠まれている。「鶴 九臯に鳴く……」は、鶴が山中の奥深い沼沢に鳴く、その声が天まで聞こえるように、賢者の名誉（良い評判）は、一般の人が知るばかりでなく、在朝の人にも知られるものであることを喩えたものである。それを踏まえて詠んだ121番歌は、仲間より遅れて鳴くこの声は天皇のお耳にまで達してほしいと、不遇を訴えている。

「詠懷」部十首は、

雲わけて都たつねにゆく雁も春にあひてそとひかへりける

須磨卷 八月十五夜、前右近尉の歌——「列に遅れぬほどぞなぐさむ」覚書——

に始まり、
（千里集・詠懷・117）

はるのみや花はさくとも谷さむみむもる、草はひかりをもみす

（同・118）

はるくにあひてもあはぬ我身かなはな雪にのみふりまさりつ、

（同・119）

しら波のたちかへりくる数よりもわか身をなけくことはまされり

（同・120）

あま雲や身をかくすらむ日のひかりあかすてらせとみるよしもなし

（同・122）

年ごとに春秋とのみかそへつ、身はひと、きに逢よしもなし

（同・123）

……と続く。春に会わぬ我が身の嘆き、埋もれて目の目を見ない嘆き、日の光（天皇の恩寵）に会わぬ嘆き、一時のわずかな榮華にさえ会わぬ嘆きが、縷々詠われている。これら千里歌の沈淪・不遇を嘆く詠懷は六朝以来伝統的に存した詩題としての「詠懷」に拠ろうが、^{注5}『詩経』小雅・鶴鳴に拠った121番歌を踏まえた宰相歌⑧にも、源氏の沈淪・不遇を嘆く気持ち達が込められている。先の千里集49番歌も、句題「旅雁秋深独別群」の出典は不明ながら、晩秋「独」「友にをくれて」「なき」わたると詠んでおり、孤独や不遇を託っている。

『千里集』の二首、

行かりも秋すきかたに独しも友にをくれてなきわたるらむ

あしたつのひとりをくれて鳴声は雲のうへまできこえつかなん

は、ともに漢詩文によって不遇・沈淪・無常を表出した歌である。前右近尉や宰相がそれぞれ源氏との関わり（従者・親友）の中で詠んだ歌④⑧も、

源氏の不遇・沈淪を嘆く心情となつて響いてくる。

五

前右近尉歌④は、中国詩に見える「孤雁」「失群雁」に注目し、千里集49番歌などに学んで、漢詩の雁表現を「列に遅るる／（列に）遅れぬ（雁）」として和歌に摂取したが、その後歌ことばとしては定着しなかった。次のような類歌が散見するばかりである。

雁

むれてくるかり、そなくなるあはれ又かへらはかすのたらしとすらん

（有房Ⅰ・38）

遊義門院かくれ給ひにける秋、かりのなくをさかせ給ひて

伏見院御歌

おくれてもかついつまでと身をぞ思ふつらにわかるる秋のかりがね

（風雅集・雑下・二〇二九）

後花園院人の夢中に告たまふ御歌

行雁も霞の中にことつてんかくとはかりもかたらましかは

御返を人々す、め侍しかはよめる

しるらめや雁の夢ちの便にもおくる、つらのなけく心を

（貞常親王Ⅱ、405・406）

漢詩との関係で言えば、蘇武の故事や擣衣は和歌の素材となり得たが、「失群雁」は障屏画には画かれても和歌的表現としては熟さなかったのである。

須磨巻を絵画化した源氏絵で、八月十五夜「源氏が海の見える廊に出て、沖を行く舟や雁の列を眺める」件を画くのは和泉市久保惣記念美術館蔵の土佐光吉（一五三九—一六一三）筆『源氏物語手鑑』（桃山時代）である。

この『源氏物語手鑑』は、「作画手法や場面選定、構図などの点で、以後に展開する源氏絵群の先駆的かつ規範的性格を持つ作例^{注6)}」として評価されており、また須磨巻のこの図様をいち早く採用したのも土佐光吉であると言^{注8)}う。久保惣本（『源氏物語手鑑』）には八十面のうち、雁は十六面に画かれており、光吉の源氏絵の情景・景物として微細な描写ながら重要な位置を占めている。当該図（図1）では雁は上空を左から右方に向かって七羽が飛行しており、最後尾の雁は私にはやはり「列に遅れ」たかのように見える。

須磨の源氏の住まいは物語本文に「言はむかたなく唐めいたり」とあり、所の有様が「絵」に画いたように「竹編める垣」「石の階、松の柱」などの造作が珍しく風趣があったと語られる。唐風だったのは、所の有様や造作だけでなく、空飛ぶ雁の様子さえも「唐めい」たものとして前右近尉歌④には詠まれているのである。

注

注1 宋成徳「万葉集の雁と中国文学」（京都大学国文学論叢18、平19・9）は、万葉集で雁が詠まれた歌と中国文学との関わりについて、六章に分けて論じている。第一章「雁と鶴」で、漢詩文で雁と鶴はよく取り合わせて詠まれたとする。

注2 『千里集』は『私家集大成 中古I』所収の書陵部蔵「大江千里集」に拠る。

注3 句題の出典は、金子彦二郎『増補 平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇』（藝林舎、昭52・5）に拠る。

注4 小野泰史「『大江千里集』「詠懐」部と「添ふる歌」―その表現と主題について―」（和歌文学研究76、平10・6）。『古今集』雑下・98の詞書は「寛平の御時、歌たてまつりけるついでにたてまつりける」とある。

注5 川村晃生「句題和歌と白氏文集」（『白居易研究講座 第三卷』勉誠社、平5・10）

注6 河田昌之「『源氏物語手鑑』考」（『和泉市久保惣記念美術館 源氏物語手鑑研究』同美術館、平4・3）

注7 廣海伸彦「物語絵の往還―近世初期の源氏絵と伊勢絵を中心に―」（『源氏絵と伊勢絵―描かれた恋物語―』出光美術館、平25・4）も、須磨巻の八月十五夜のこの場面を描く源氏絵の例は、十七世紀以降に偏重しており、この図柄がいち早く光吉に採用され、それが光吉の画系に連なる次世代の絵師へと継承された、とする。

注8 注6に同じ。

（余田 充・四国大学文学部日本文学研究室）

須磨巻 八月十五夜、前右近尉の歌――「列に遅れぬほどぞなくさむ」覚書――



図2－図1の「雁」部分

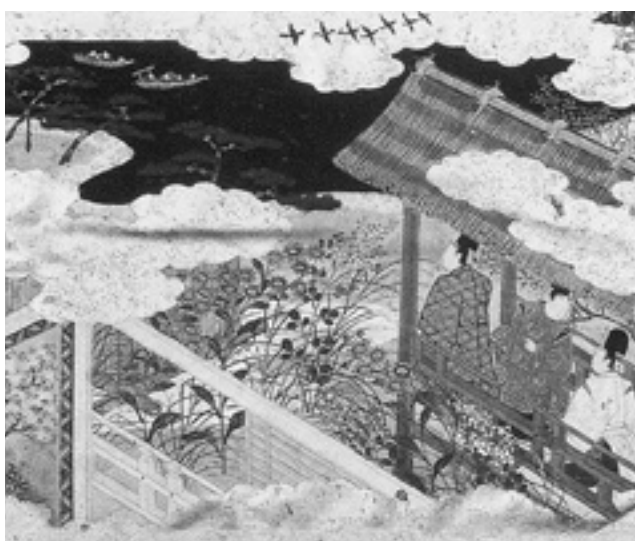


図1 一土佐光吉 源氏物語手鑑 須磨第1段
和泉市久保惣記念美術館